

発達の観点からみた Anorexia Nervosa の心身医学的研究*

第1報 思春期女子症例

岡山大学医学部附属病院 精神神経科

(主任 大月 三郎 教授)

岡山大学医学部附属病院 三朝分院

(主任 森 永 寛 教授)

古 元 順 子

(1982年1月4日受付)

はじめに

過去10年間に岡大附属病院精神科および岡大三朝分院内科で治療を行った anorexia nervosa は 55 例に達したが、この症例数は九大心療内科の56例の報告(青木ら、1976)に次ぐものである。対象の診断基準を広くとり、1) 器質異常や精神病が認められない。2) 標準体重の20%以上の痩せを示す。3) ある時期に始まり3カ月以上続く。という条件を充すものとした。これらの症例は必ずしも思春期女子に限られるものでなく、55例中5例は男子であり、発症年代別にみても前思春期例6例(男2例,女4例),思春期例37例(男2例,女35例),成人期例12例(男1例,女11例)と変化に富んでいることは注目に値いし、本疾患が心身の発達の観点から検討されることの意義が示唆された。

今回は anorexia nervosa の中核である思春期女子群の中から、精神療法の経過を通じて心身の相関が明らかにされた2例について報告する。

症例提示

症例1. 初診時17才の女子高校生で、頑固な便秘、胃のむかつき、食思不振、著しい痩せ、無月経を主訴として来院した。

家族は父方の祖母、父、母、弟との5人である。祖母は60才頃幻覚・妄想状態で精神病院に入院したことがあるが現在は家庭で小康を保っているという。他には家族内に特記するような疾患は知られていない。患者の父親は「理解のある父」として感じられているが、母親は「猜疑心が強く、蔭日向があり、愚痴っぽく、子供に対して干渉的である」と感じられて来た。弟は患者が3才の時に生れたが当時自分に対して「今日からあんたはお姉ち

ゃんだ」と繰り返して云い聞かせたことが不思議に忘れられないと述べられた。患者の幼ない頃から父母間には口論が絶えず、母親は父親についての愚痴を子供達にこぼすのを代償するかのようになり、子供達の欲しがる物は何でも買い与えてくれたという。併し、患者は小学校3、4年頃から自分は暗い性格で友達から嫌われていると感じて、星や靈魂について興味をもつようになった。6年頃、明るい友達に感化されお転婆娘として振舞うこともあったが、中学1年の時その友達が転校すると再び孤独で消極的な少女となった。中学2、3年頃、両親の不和のため離婚寸前にまで至ったが、患者は勉強に熱中することで気持ちを紛わせ優秀な成績で公立高校に合格した。高校生になってからは、家庭の暗さを友達に知られまいとして故意に明るく振舞っていたが、ある時友達に「貴女の眼は空虚だ」と云われ劣等感が募り登校するのが嫌になった。その頃患者の言葉を借りると、「私の性格と反対に、真赤なばらのように明るい娘」に近づいたが、たまたまその友人が胃を悪くして食事がとれず痩せ始めたのに影響を受けて患者の食欲も減退して来た。母親は患者に対して、食事時になると「食べて欲しい」と泣くように懇願する一方では、患者の食べ残しの皿を疑い深く調べるようになったため、患者は母親の言動を「うるさい」と感じて反抗し、更に食事を摂らないという悪循環が繰り返された。食事だけでなく、患者のしたい事に対しても母親は「体力がないから」という理由で反対するようになったため、患者はその度に数日にわたって口をきかず何も食べないという方法で反抗した。痩せが極度となりみかねた家族に連れられて来院するに至った。

入院後も患者は自分が病的に痩せていることを頑なに否認し、治療者に対しても「母と同じ干渉はいや」と拒否し続け、一旦は退院もやむを得なかった。併し家に戻

* 要旨は、第22回中国・四国精神神経学会シンポジウムで発表した。

治療意欲もみられなかったため一時退院の止むを得なかったのは前例同様であった。家に戻り母親がたまたま妹を連れて外出したのに腹を立て、母親の見ている前で往來にとび出し車にはねられようとしたため再入院せねばならなくなった。

この度は治療者が介助すると食べるという反応を示したため徐々に食事量を増してゆくと、やがて患者は「努力しても十分に報いてくれない」と腹を立て、治療者を攻撃するようになったが受容的に接しているうちに次第に「努力しても報いられなかった」幼ない頃の葛藤が表現されるようになった。更に、患者は母親に可愛がられている妹に対抗して、痩せて美しくなることで勝ちたいと思っていたこと、母親から奨められたバレエで体を消耗した上に食べないで死んでしまえば、その時こそ母親が自分に関心をもってくれるだろうと思ったことなどが明らかになった。一方で患者はこれまで治療者に対しても母親に対してとり続けていた態度と同様の態度をとっていたことに気がつくと同時に、これまで母親が妹にすることを自分にもしてほしいと口に出して云えなかったのは、母に甘えたい気持を無理に抑えていたことにも気づくに至った。

患者によると、「妹が生まれた時から私には一人遊びの

くせが出来、人形が私の唯一の友達だった。ある時母にもうお姉ちゃんだから人形と遊ぶのはやめなさいと言われて人形を隠されてしまった。昼は人形と遊んでいても母が仕事から帰る頃になると、それまで遊んでいたものを片づけて、母に見つかりはしないかとはらはらすようになった。素直に母の言うことを聞き、口答えをせずに暮していれば気に入ってくれるのではないかと母の言うなりになった。妹に云いつけることでも進んで引き受けた。それでも私はよく叱られた。小さい私にとり、無二の親友である人形をとられ、その上叱られて何の楽しみもなかった。私は母に甘えられない子供として育った。けれども今の私には変化が起っている。子供に甘えられない母親ほど可哀想なものはないのではないかと気がついた。早く健康になり思い切り母に甘えたい気持で一ぱいです。」

第一の症例と同様に、この患者も葛藤の言語化を境として数年ぶりに自然排便が起り食思が亢進して体重曲線が上昇すると共に基礎代謝率も -30% から $+39.6\%$ へと飛躍的に改善した(図2)。病前の体重に戻って2週後から月経が再開し、その後の経過もよく、10年近く経た現在看護婦として働いている。

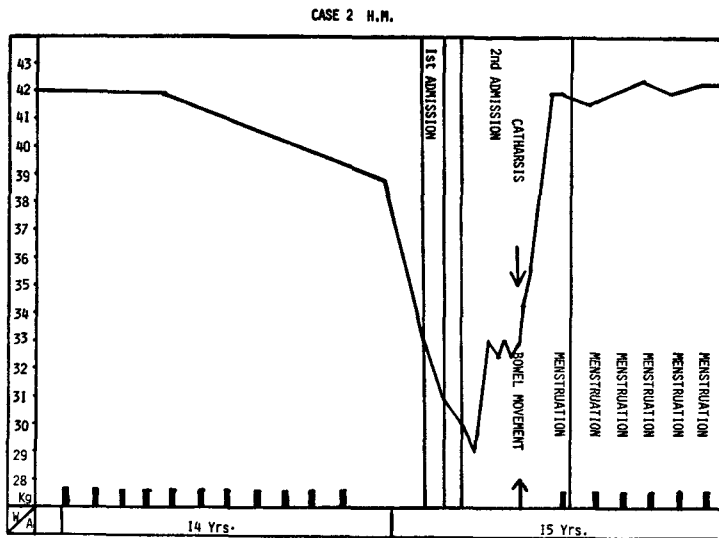


Fig. 2.

考 察

以上の2例にみられる共通の特徴を要約すると

- 拒食の発症は、思春期特有の競争的な運動や勉強に身体を酷使することと一致して現われているが、こ

の身体の酷使は、心理的にみると自己破壊の傾向を伴う葛藤的なものである。すなわち陰性感情をもっている母親に対する抗議としての過動と拒食であるが、それは同時に「痩せて美しくなる」ことによって

不全感, 劣等感から自尊心を回復するという心性でもある。

- 2) 母親への陰性感情すなわち女性としての同一化の障害の背景には乳幼児期にまでさかのぼり得る依存欲求の不充足と対象関係の障害が存在する。
- 3) 精神療法により, 母娘間の葛藤が言語化されるのと一致して身体症状にも著しい改善像がみられる。永年の便秘が解消し, 食欲, 基礎代謝が亢進すると共に病前の体重が回復して月経が再開する。

これらの事実は *anorexia nervosa* の一次的心因が *preoedipal conflict* であることを示すものであり, Selvini (1965) の本症解釈の理論を裏づけるものである。また, 母親に対する葛藤の解決と一致して消化器系症状の著しい改善がみられたことは MEYER ら (1957) や EHRENSING ら (1970) のいう *anorexia nervosa* は最年少児期にさかのぼる *gastrointestinal disturbance* であるとする考えを支持すると思われる。CRISP (1967) や BRUCH (1973) が *anorexia nervosa* における母娘間の葛藤を, 食べない娘への母親の不安・干渉とそれに対する子の反抗というような, *dietic behavior* に伴う二次的葛藤とする考えには合致しない。思春期の少女は現代の社会では多かれ少かれ *diet* を求めるものであるが, 何故その一部のもののみが本症を示し, 大多数のものは示さないのかを考える上でも, MECKLENBURG ら (1974) のいうような間脳脆弱性もしくは失調性を考慮する基盤に早期の対象関係の歪みに由来する心身を含めた自我機能の弱さがあることは否定出来ない。

おわりに

今回は思春期群の中から2症例を中心として *anorexia nervosa* の心身相関の病態について若干の考察を試みた。今後引き続き, 思春期男子例, 前思春期例, および, 成人期例についても検討を重ねて, 発達の観点から *anorexia nervosa* 全般に共通の病態と, 発達段階に応じた病態の特異性とを明らかにしたい。

稿を終えるにあたり, 御指導と御校閲をいただいた, 岡山大学医学部神経精神科, 大月三郎教授, 同大学三朝分院内科, 森永寛教授に厚く御礼申し上げます。

文 献

青木宏之他 (1976) 神経性食欲不振症の病態発生機序に関する心身医学的考察。心身医, **16**, 30-38。

BRUCH, H. (1973) *Eating Disorders — Obesity, Anorexia Nervosa and the Person Within.* London: Routledge & Kegan Paul.

CRISP, A.H. (1967) *Anorexia nervosa.* *Hosp. Med., May*, 713-718.

EHRENSING, R.H. and WEITZMAN, E. L. (1970) The mother-daughter relationship in *anorexia nervosa.* *Psychosom, Med., 32*, 201-208.

MECKLENBURG, R.S., et al. (1974) Hypothalamic dysfunction in patients with *anorexia nervosa.* *Medicine (Baltimore), 53*, 147-159.

MEYER, B.C. and WEINROTH, L.A. (1957) Observations on psychological aspects of *anorexia nervosa*, Report of a case. *Psychosom, Med., 19*, 389-398.

SELVINI, M.P. (1965) Interpretation of Mental Anorexia, in Meyer and Feldman, (eds.), *Anorexia Nervosa.* Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 1965.

A PSYCHOSOMATIC STUDY OF ANOREXIA NERVOSA, WITH PARTICULAR

ATTENTION TO THE DEVELOPMENTAL ASPECT

PART I FEMALE ADOLESCENT CASES OF ANOREXIA NERVOSA

Junko Komoto

*Neuropsychiatric Department of Okayama University Medical School (Director: S. OTUKI)
Division of Medicine, Misasa Branch Hospital,
Okayama University Medical School (Director:
H. MORINAGA)*

Abstracts: The author reviewed 55 patients who had been treated as *anorexia nervosa* at the neuropsychiatric department of Okayama University Medical School and at the internal medicine department of Misasa Branch Hospital, Okayama University Medical School, for the past ten years from 1970 to 1980.

The criteria for the present study was as follows ;

- 1) absence of psychosis and no known physical illness for ematiation,
- 2) weight loss of at least 20% of original body weight,
- 3) duration

of anorexia of at least three months.

55 patients were classified into three groups according to the age of onset ; pre-puberty group, adolescent group and adult group. Analysis of two female adolescent cases was described in this report for the preliminary study.

The results were as follows :

1) Onset of self-starvation coincided with competitious hyperactivity in sport and/or study. Self-starvation seemed to have psychological meaning of retaliation towards the mother of each patient, of compensatory gain in the

dependancy need, and of keeping a pride in pubertal competitions including a pursuit in the slim body image.

2) There was the evidence of a disturbed female-identification which originated from the disturbed mother-child interaction.

3) Catharsis with analytically oriented psychotherapy improved gastro-intestinal disorders such as anorexia and constipation and reversed the negative BMR (basal metabolic rate) to the positive BMR. Recovery of menstrual periods was followed in an accordance with re-gain of the original body weight.